『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

生命（いのち）の足音

本多　恵

只今紹介されました、本多でございます。こちらへは初めてお伺いすることでございます。私の長女が大学の四年生でして、何か自分の子どもの前で話をするような、そんな気持ちがしております。

実は今度、光華女子大学の皆さん方とお目にかかるということで、ふっと私の胸をよぎったものがございます。昭和三十六年に、親鸞聖人がお亡くなりになって七百年の記念の法要がありました。その時に、大谷大学と龍谷大学と光華女子大学と京都女子大学の四大学が合同で弁論大会を催しました。京都の西本願寺の前にある本願寺会館を会場として開かれました。

私もその頃は皆さん方くらいに若かったので、「歴史は私がつくる」という題で、弁論大会に出席しました。

それぞれの学校から選ばれてきた、三人ずつの選手が一堂に会しました。私は、大谷大学から優勝しようという意気込みでやってきたのですが、光華女子大学から来られた方が一番で、負けたなと思いました。それで私が二番で、大谷大学からきて今、飯田女子高等学校の校長をやっている同級生が三番でした。

そんなことで、そういう先輩の伝統を受け継いでこられた皆さん方が、どんな方々かなと、そんなことを楽しみにもしてきたことでございます。

今回の話の題を「生命の足音」とつけさせてもらったのですが、これにもいろいろ思い出があります。結論から先に申しますと、自分の歩んできた足跡を振り返るということだけでなしに、自分の歩んできた生命の歩み、生命の歴史の足音を今、聞きつつ歩んでいきたいということなのです。

今、私は、五十一歳ですが、五十一年の自分の刻んできた足音を耳で聞きながら、心で確かめつつ、今日を生きていきたいなと思っておりますから、そんな題を出したのです。

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

この「生命の足音」には、私の過去の懐かしい思い出があります。私は家が貧しかったので、高等学校は定時制の夜間部へ行っておりました。定時制の夜間部は非常に学力が低いのです。勉強する時間がないといえば弁解になりますが、実際に時間もありませんし、また、昼働いて夜勉強するのですから、皆半分眠っているのです。確かに学力は全日制の人と比べると落ちますが、人生を考えるということについては、むしろ夜間部の学生のほうが深く考えているのではないかと、そんなことを思っておりました。そこで私たちは五人ほどの仲間で文集を作っていたのです。私はそんなことが好きで、中学時代も壁新聞を謄写版で印刷して発行したりしていました。高等学校の二年生の時に、五人ですから謄写版を使うほどではないので、カーボンの複写用紙を使って文集を五部ほど作って、お互いに読み合って、「人生を語る」と言ってうぬぼれていたことでした。その時に文集の題を、どういう題にしようかと話し合っていた中で、一人の男が「生命の足跡」という題をつけたのです。私は「生命の足音」、ほかにも「我が人生」とかありました。そんなのを皆が持ち寄りまして、話し合ったのですが、同じ生命という言葉が二人出たものですから、では「生命の足音」か「生命の足跡」にしようということになりました。しかし、足跡というのは過去の遺物です。やはり、自分の過去に耳を傾けなが

ら、現在というものを確かに生きていきたいということであれば、むしろ「生命の足音」がいいのではないかということで、この「生命の足音」という題にしたのです。

私は自分の大学四年の娘にも言っているのですが、高校、大学の時に真剣に考えたことというのは生涯を貫いていきます。その頃の出来事というのは大切なものだと思います。

「生命の足音」という文集は高等学校を卒業すると同時にやめてしまいましたが、その後、自分の心に深くとどまったことを書き記しておくノートを今日まで持ち続けており、そのノートの題をずっと「生命の足音」とつけています。

今、大阪の教化センターの主幹と紹介していただきましたが、昨年の一月、大阪に来まして、今年の六月、初めて「教化センター紀要」と申しまして、私どもが自分なりに勉強した足跡を綴った文集を年に二回ずつ発行していくということで創刊しました。その題も私が「生命の足音」ということにしたのです。研究発表の書物にしては、ふさわしくない題だといわれはしないかと思いましたが、割合、すんなりと、みんなが賛成してくれました。「生命の足音」とは、高等学校から今日までずっと私の生命とともに私の中に流れてきた大切な言葉の一つでございます。恐らく生涯そのことが、私の一つの主軸になっていくのではないかと思います。

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

そういう自分の生涯を貫く一つのものが形成されるのは、やはり、皆さん方の年代であろうと思います。そういう意味では、この時期を大切にしなければならないと思うのです。

この人生には、オギャーと生まれてきた時から、四つの限定の中を生きなくてはならないということがあります。これは人間すべてに平等に約束づけられたことだと言われています。

一つは独自性ということです。これは、私の人生は誰にも代わってもらうことはできないということです。自分の人生が自分にとってどれほど嫌な人生であっても、また女性に生まれてこなくて、男性に生まれてくればよかったと思ったとしましても、自分の人生を人に代わってもらうことはできない。男になるわけにいきませんし、そしてまた、自分が歩んできた人生を人に代わってもらうこともできない。どれほど悲しいと思われる人生であっても、自分が選んだ人生ではない。なぜこんな私として生まれてきたのかと思っても、その自分の人生を誰にも代わってもらうことができないということです。また、どんなに優しい気持ちのある人でも、相手の人生を代わってあげることができない。弱い子どもさんを持っておられたお母さんが、私の友だちに、できることならこの子と代わってやりたいと言って泣きながら話されたことがありますが、しかし、どんなに思いやりの深い人であっても、相手の人生を代わってあげるこ

とはできない。これが人間の生まれてきた時からの、一つの約束なのです。これを独自性といっていいかと思います。

もう一つは唯一性ということです。これは自分の人生はただ一回限りで、繰り返すことができないということです。先程、高校・大学の時の自分の考え、自分の生き方が生涯を貫くものになる場合が多いから、とくに大切にしなくてはならないのではないかと申しました。もう一度、大学時代に戻りたいと思いましても、大学を卒業して社会人になりますと、もう戻るわけにはいかないものです。もっと厳密に言えば、今日の私たちと明日の私たちとは違うのです。ですから昨日の私に戻ろうと思っても、戻ることはできないというのが、人間の生まれた時からの約束です。ですから、今日一日をいいかげんに過ごしますと、その積み重ねはやがて一年になります。その一年の繰り返しは自分の一生につながっていくのです。一日一日を大切に生きるということが、とりもなおさず、自分の一年間を真剣に生きることですし、それから自分の一生涯を大切に生きることにつながるわけであろうと思います。人間は繰り返すことのできない一日限りの人生を歩んでいる。これはどんな人であっても、いつの時代の人であってもこの約束から離れるわけにはいかないのです。

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

そして、次に有限性。これは終わりがあるということです。終わりがあるということは死ぬということで、皆さん方、死ぬなんていうことは考えもせずに毎日生きておいでになるでしょうが、大勢の中には病気に冒されて亡くなっていかれる方もあるに違いないし、交通事故で亡くなられる方も身の周りにあるに違いない。しかし、自分は大丈夫だと思っております。先日、あるおばあちゃんが言っておられました。「このごろ物忘れがひどくなって、すぐに何でも忘れてしまう。しかし、先生、わしのほかにも物忘れのひどい人が沢山おるが、死に忘れた人は一人もいないですね」と。今まで、どんなお年寄りであっても、死に忘れてもう三百歳になるというような人は一人もいないのです。みんな、やっぱり次々に死んでいかれる。必ず終わりがくるということです。これが有限性、限りがあるということです。

最後は、その終わりがいつくるかわからないという無常性です。まだ大丈夫だと思っていましても、終わりがいつくるかわからない。ですから「十年計画」などと計画を立てますけれども、世の中の生活は十年計画、五十年計画で見通しを立てていかなければならないかもしれませんが、厳密に言いますと、十年自分の命がある保証は誰一人ないわけです。保証を持って生まれてきた人は一人もいない。ただ自分の終わりがいつなのか、それが自分でわからないだけ

です。

ギリシャのある神様が、人間にいろいろな能力を与えた。更に、動物にはない大切な能力も与えた。しかし、ただ一つ忘れたことがあった。それは、自分の運命を知り、自分の死ぬ日を知る、その能力を与えるのを忘れた、ということだそうです。これは幸いなことか不幸なことか、まあ、自分の死ぬ日がわからないから、割合にこにこして、今日を生きているということもあるのであろうと思います。

しかし、この四つの限定を見た時に、私にははっきり言えることがあるのです。それは逆に申していきますと、いつ死ぬかわからない、そういう無常なる人生ですから、いつ死んでも悔いのない今日を生きなくてはならないということです。これは大切なことだろうと思います。それから必ず終わりがくる人生だから、その生ある間、後悔しない人生を送らなくてはならない。これが私の願いなのです。一回限りの人生であるから、今日一日を精いっぱい生きなくてはならない。誰にも代わってもらうことのない人生であるから、私でなくてはできない私にならなくてはならない。つまり代わってもらう必要のない私の人生を送っていかなくてはならないのではないか、ということを人間の限定ということで思うのです。

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

今日は「生命の足音」ということでお話ししておりますから、私のそういう過去をちょっとだけ聞いていただきたいと思います。

高校生時代、私は家が貧しかったと申しました。私は寺の生まれです。ですから、他のお寺に、いわゆる奉公に行っていたのです。今では奉公なんていうことはあまりいいませんが、十年そのお寺にいました。ですから、大学は五年ほど遅れて入りました。大学でぶらぶらして落第したわけではありませんが、十一年大谷大学にいました。その頃、うちから仕送りがなかったものですから、自分で生活していかなければならない。しかも、学生結婚していましたから、子どもも養っていかなければならない。それで、大学院に入ってからのことですが、仕事をしていたわけです。病院に勤めておりまして、これが精神病院の看護士という仕事でして、そこの看護長などもして、どちらが本職なのかわからないような生活を十年ほどしておりました。その後静岡の別院に十二年もいたのです。大ざっぱにいって、あちこちに十年単位でいたのです。

高等学校を卒業して、二十歳頃のことですが、こういうことを思ったのです。ここは私の第二の故郷だと。第一の故郷は、父親母親のいる私の生まれ故郷です。しかし十五歳から二十四

歳まで寝起きをともにしながら、いろいろ教わりもし、お手伝いもさせてもらっていたこのお寺が、私にとって第二の故郷だなと思いました。

では故郷というのは一体何なのか。故郷というのは、三つあるのです。私、思いますに、一つは自分の生まれたところです。それから、もう一つは自分の育てられたところ。そしてもう一つが、懐かしいところです。啄木の詩でも「ふるさとの山に向かいていうことなし　ふるさとの山はありがたきかな」というのがあります。啄木はふるさとを追われるようにして出て生涯を送った人ですが、しかし、ふるさとのことを有難い、懐かしいと言っています。ですから、懐かしい場所がふるさとなのです。

故郷というのは、自分の生まれたところであり、自分の育てられたところである。そして、どこにいても思い出すごとに懐かしさを感じさせる場所、これが故郷だと思うのです。

とはいえ、故郷はやっぱり私どもが実際に住んだ場所ではないでしょうか。例えば、私が中学三年生からいたそのお寺での十年間がもしなかったならば、今の私はなかったはずです。その十年間で新しい私が生まれたということです。また大学生活を十一年やってまいりましたが、その中で、新しい私が生まれたはずです。そうしますと、しばらく身を置いた場所という

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

のは、そういう意味では、自分の生まれた場所であり、新しい私が誕生した場所であって、そういう私が育てられた場所である。

ここで一つ申しあげたいのは「懐かしい」ということです。二十歳前後に思ったことは、自分が長年生活した場所は、いつでも帰れる場所でなくてはならない。その土地を出る時に、それこそ後ろ足で砂をかけるような形でその場所を去ったならば、そこへは行きづらいということがあります。例えば、この学校も皆さん方にとっては、次には自分の母校になります。その自分の学校から、ある新しい自分が生まれてくるわけです。そこで自分が育てられるわけです。ですから、それが懐かしい場所であるか、汚らわしい場所であるか、これはそこでの生活が、それを決めてくることなのです。もう二度と、あんな場所には行きたくないという場所になるか、それとも懐かしくて、いつでも足が自然に向いていくような場所になるか。これは場所の問題というよりも、自分の問題なのです。自分がそこにどう関わりを持ったかということです。

大阪に来まして、今、一年半になります。大阪に五年いるか、十年いるかはわかりませんが、ある意味では、私の後の生涯をそこに賭けているような気持ちがあります。たとえ、他の

地に行きましても、大阪をいつも懐かしんで、足が向くような場所にしなくてはならないという気持ちで、今、私は生きております。

そういう私どもの、いつでも帰れる場所、また懐かしい場所というのは、同時に、待たれている場所でもあります。遠方から京都へ来ておられる方もおいでになるでしょうが、家へ帰りますと、お父さんお母さんが待っておられるのではないでしょうか。また国の友だちや後輩が待っている、そういうことが、やっぱり懐かしいので、いつでも帰ることができるという、そういう場所になっていくのではないでしょうか。

人間というのは一人ひとりで生きているのです。しかし、一人ひとりで生きているということは、同時に間がらを生きているということです。人という字は、二本の棒が寄り添って人というのだと。更に、間という字を書いて人間という。人間は一人では生きられない。一人ひとりの生命の尊厳がいわれると同時に、やはり間がらというものが大切にされなくては、人間としての生き方ではないといわれます。そういう間がらをより良くし、間がらの完成に向かって進まなければならない。仏教では、成就ということを申します。間がらを成就していく。私たちは親子という間がら、兄弟という間がら、学生同士という間がら、いろいろな間がらを生き

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

ています。その間がらを成就していく。それについて仏教では、こういうことをいっています。

布施という言葉があります。布施というのは、施しをするということです。しかし、施しをするには、物がなくてはできません。赤い羽根の共同募金などでも、お金を一銭も持っていなければ、募金するわけにはいきません。では物がなければ、施しをすることができないのかといいますと、できるのだと教えます。それを無財の七施と申します。

物がなくても施すことができる。それが七つあるというのです。その一つが仏教の言葉では眼施（がんせ）といって、目を施すことです。「目は口ほどに物を言う」といいますように、目というのは非常に働くものです。面白くない人と会いますと、目つきが三角になる。しかし、笑みをたたえた澄んだ目というのは美しいものです。皆さん方が悲観されるといけませんので、あまり強くは申しませんが、人間、齢をとるとだんだん目が曇ってくるのです。目が曇ってくるということは、心が曇ってくる証拠でして、赤ちゃんの目は非常に美しい。澄んで、青いような目をしています。それが、だんだん濁ってきます。私の目なんか、友だちが「お前の目は、腐った魚の目の色だ」と言います。目を使っているうちに、毛細血管が浮かんできて汚れたりしま

す。皮膚が汚れてくるように、目もやはり齢をとるに従って汚れてくるのに違いないのでしょう。

しかし、汚れたなりにも美しさがあるはずです。心の美しい人は目も美しい。目が濁るということは、やはり心が濁ってくることなのでしょう。ですから、ふっと会った時の目つきひとつで、相手と心がぴたっと一つになることもありますし、目を見ただけで、哀しみを感じるということもあります。目を施すというのは、大切なことなのです。人間、間がらが成就していく上で、目は大きな働きをします。皆さん方、恋愛の経験がぼつぼつおありになるかと思いますが、本当に信頼し合った者同士なら、目を見るだけですでに心が通じ合うということがあります。目は口ほどに物をいい、心がそこに表れてくるということがあるわけで、目を施すということがどれほど人間と人間との間がらにおいて大切なことであることか。

その次が顔施です。これは顔を施すと読みます。顔というのは、いろんな意味で大切なものであると思います。一つ申しますと、顔はその人の心の歴史が刻まれていると思うのです。また皆さん方は、親が悪いからといって、親に責任を転嫁しても許される時代です。人間四十過ぎれば自分の顔に責任を持てといわれます。私も五十一ですから、自分の顔に責任を持たなけ

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

ればならない齢です。しかし、皆さん方も生まれた時から自分の写真をずっとご覧になっているでしょうが、やはり変わってきていますね。小さい赤ちゃんと大学生の皆さん方を比べますと、確かに違いが大きいです。若い時の十六、七年の違いというのは非常に大きい。

齢をとりますとだんだん親に似てくるということもいわれますが、顔・形は似ていましても、その人の生活が顔に出てまいります。先日もある五十五、六才の人に会いましたら、やはり美しい老年を迎えたいと言っていました。「美しい老年を迎えるには美しい心で生きなければならないですね」という話をしていたのです。

自分の人生の歩みというものが顔に表れてくる。皆さん方は、しわはありませんが、しわに人生の歴史が表れてくる。言葉で自分の心はごまかせたとしても、顔に刻まれた、その人生の歴史は隠すわけにはいかない。こういうことがあって、顔というのは自分にとっても非常に大切なものなのです。と同時に、相手に対する場合でも、心から出た微笑みは、これほど美しいものはありません。だから、いつもにこにこしていれば、にこにこした顔つきになるのです。いつもしょぼんとした顔つきをしておりますと、しょぼんとした顔つきになってきます。よく腹を立てる人は、嫌悪な顔になっていくということがあります。やはりその人の生活というも

のが、顔に表れてくると同時に、その人が相手と対した時に、どういう気持ちで相手に対しているかということが、一刻一刻顔に刻まれていく。そしてまた、それが相手に伝わっていくということが、顔にはあろうかと思います。

次が言施（げんせ）といいます。これは言葉です。言葉というのは、これまた大切なものです。「ピストルで撃たれた傷は、治れば痛みはなくなる。しかし言葉で撃たれた傷は、生涯、ことあるごとに痛みだす」ということを言った人がいました。包丁で手を切ったとしましても、そういう傷は治ってしまえば、傷あとは残りますが痛みはありません。しかし、人からぐさっと言われた一つの言葉による傷というのは、生涯、ことあるごとに自分の胸の中で疼き出す。ということは逆にいえば、一つの本当に大切な言葉を聞くことによって、その人を生涯勇気づけていくということができます。私も中学から高校、とくに大学の時に、いい先生に出会いまして、その先生の言われたことがいまだに一つの心情となっていることがあります。直接関係はないかもしれませんが、紹介します。

最初に申しました弁論大会の時のことですが、親鸞聖人のご遠忌の法要がありまして、その時に学生全部が動員されまして、東本願寺へお手伝いに行ったのです。その時の記念品にペン

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

シルケースを頂きました。そのケースの中にこういう言葉が書いてあったのです。「念仏申さんと思いたつ心の起こる時、即ち、人間の生活が始まる」と。これは何という言葉かなと思いながら読んでおりました。それから、それがある先生のお書きになったものであるということを聞き、また、それが『歎異抄』の中の一節をもとにしているということもわかりました。

宗教に目覚めるということから人間の生活が始まる、ということであろうかと思います。そういう人間の大切さ、人間の生命の尊さというものに、本当に触れることがなかったならば、人間は人間の生活を始められないということでもあろうかと思うのですが、そのことがずっと私の課題になって、今日までできているのです。

人間が、本当に人間の尊さに目覚めなければ人間ではない。人間でなければ一体何なのだ。これはやはり、動物に近い生活ではないでしょうか。欲しいものを欲しいとして動き回り、そして、嫌なものは相手が人間であっても傷つけ合う。これではいわゆる弱肉強食といわれる動物の世界とどこが違っているのでしょうか。

パスカルは「人間は考える葦」であると言いましたが、仏教の先輩は「念仏申さんと思いたつ心の起こる時、即ち人間の生活が始まる」とおっしゃる。これが人間とは何かということを

今日まで私が考え続ける、一つの大切な拠り所になっております。皆さんは高校や大学で、どういう言葉に出会われたでしょうか。自分を本当に納得させた言葉というものが、自分の生涯を貫いて、その人に生きる勇気と希望を与え続けていくということは必ずあるはずです。その言葉に出会わなくては、人間に生まれてきたかいがないというような言葉もあるはずです。言葉一つによって自ら生命を失った人もあります。また生きる望みを失っていた人が、一言、言われたことによって生きる勇気を与えられたということを、あちこちで聞いております。そういう人間を本当に生かす言葉、本当に勇気づけていく言葉を使うということは、大切なことであろうかと思います。その一言を語り合うことによって、生涯の友となるということも現実にある話です。こういうことが無財の七施の中の三つ目に出ているのです。

四番目は、身施といいます。身で施すことです。何かできなくて困っている人があれば、それを助けてあげるということも、身で施すことですし、お互いに協力し合うということもそうであろうかと思います。それ全体が、心を施すことになるのです。最初申しましたように、心というのは、言葉の上にも表れます。そして顔の上にも目の上にも表れてくるのが心です。ですから、心を施すということが、本当に人間と人間とが間がらを成就していく大切な要素であ

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

ると思います。

最近、私がとくに思いますのは、優しさということなのです。人間にとって一番大切なものは何かといえば、これはいろいろ言い方はありましょうが、やはり、優しさ、思いやりの心であるといえないでしょうか。この優しさの優の字は、中国で出来た字です。右半分は「憂い」です。にんべんは「人」です。この二つが合わさって出来たのが「優」しさという字です。憂いというのは、もとは結婚して間もない女性が、この人とともに生涯を生きていこうと決めた相手に死に別れた悲しさを表した言葉なのです。自分のすべてをかけ、自分が頼りきっていた夫に死なれた悲しさを「憂い」というのです。そしてそれに人がついたのは、そういう人間が生きることもできないほどに悩み、悲しみに沈んでいる、その人の心に同感するというのが「優しさ」なのです。そういうところに本当に人間と人間の間が完成していく糸口があるのではないかと思います。そういう意味では、人間にとって一番大切なものは優しさだといってもいいのではないかと思います。

時間がないので、無財の七施の六番目と七番目は省略します。そこで、最初、テーマに出しました「生命の足音」ですが、今まで自分が歩んできた過去の足跡に優しさの響きがあったか

どうかということを言いたいのです。むしろ自分を構えて、相手の上に立とうとしたり、あわよくば、相手をたたき落とそうというような、優しさと逆行しそうな足音の響きが過去からしてきはしないだろうか。そういうことに耳を傾けながら、二度と繰り返すことのできない、誰にも代わってもらうことのできない人生を、大切に生きていかなくてはならないのではないかと思いましたので、こういうテーマを出したことでございます。皆さん方の大切な時間を割いてしまいましたが、最後まで静かによく聞いてくださいまして、有難うございました。

――一九八八・一〇・二八――